863
65

国立国会図書館　　タイトル『俳諧何布久魯』 請求記号 863-65

ガラス使用

863-65
帝国図書館蔵

序

芭蕉翁の袖に香なれは しらて
元祿法師携こ前にて 日庵
とり越いかめさうき 世の
月の見果ぬし絡しあんたのまれる
志の系子法師なくなりて土里

播田と

那不久呂

六日庵編

国立国会図書館　タイトル『俳諧何布久魯』　請求記号 863-65
ガラス使用

しはらし十三年芭蕉庵しれる
人まても志らしむ
かきし柴を深草の
深くしてをえ嵐のいへとなり
庭も涌果てしも蜂の雎ると
今秋とされたるきしますこにも
なりてのちは
明治年大の卧まとをあなり
涛家ましこ
まさ一時先人志まりし

芭蕉のし恵ありかく ふるくありとき
元夢佛の木像を安置をなま
別法河まだ旅人の跡に
ありてひ
今日庵も志ふ無きし旅しさを
起し給ひおもむきの世に
阿もし前の方を純於時まあへる
しなれし乞不屋のうち再建の

ありのし跡と発句をなくなく
まつ此木つくゑの　乙鳥も哉
究理て
一筆紙ちらしをも
あまりもの発句

一茶誌

敘

ここ日庵といふ一つの俳諧あり其名
さま〜の名残り紙といふそもそも
何ふくろとなふ俳諧やとい
ひしにいかしとしの変化窠の
伊賀の国にありしとよ如意
友なの中よりめてたき俳諧の
懐紙なにかしおもてこそ残りのく

もとの来し　ふくろ寺書より
さゝん書翁とも白ふく呂宇翁
いふ庵きし給れは紀うして何翁
とよふ禅は六条河原院を仰
其の院と書給ひもう計し　よまゐ
是の菟賦物の文字給ひらひ若うる
袋のふるみにおちさる嬢也なる
亀し　これりいまた世の化者の

こゝもとつみいまゐれく清浦
船長のとりこみ媼く語ま嵐し
うつそみく科ろくろをたゝみ
中よれもあこえゐるいとも
おしいまほしきるもあまた
と囊を括まよう紀ん者しとや
きゝおくぬまくいさこのその
をるはし紋吉すし　ゐ

くちぬるを
つゝみ侍る
随斎成美

成美

いよし丁卯の春伊賀越し
けふおもひて出舞ひ
洛下なる何某かもとにてふるき
懐紙をとり出しこの
外いまた世に出し洛布さきをまた
くとおもふものから
それ懐紙を集のまゝは
ここにあらはしぬ

帝国図書館蔵

元禄三年二月六日

誹諧之連歌

鶯の笠落したる椿かな　桃青

古井の蛙草より入鮮　乙木

陽炎のそれ消さ海

見んいつまし夕飯ま　百歳

招りとこのうらし
月こゝろせしや
村鼓

梢なる濤の
柳とかくしへん式之

きうし銀ゆかしる
風あかしまゝ
梅嶺

俺しるは寺みる
にうかぶ約はけ一桐

世帯おなべくべき
いのちなからなり
槐市

待わりし妹ら
浴とゝへはさえく
村鼓

芳さへ酒りし
二日酔すれ　桃雪

古にとわれぬ
馬うしゆく　化木

まへく涼しに
月乃花常麦　百歳

行春や行ら庵りし
木の実の落るとゝも　梅額

鳴次人まん
なる利宮きや　一桐

猫殿の隣かん　呉宮

市うしはけ愛て
桟地うしもけハ　式之

幸その年ハ
孫曽孫うやまは
さる花の出の其は　百歳

菱垣にさき紀りし
さ海く乃蝶　乍来

夢みる剣古と
これあふれなれし　桃杏
尾上の紙魚ついり
本奥さりゆき　梶蘭
ものの笹きぬ

寝てたりし浮世の　村鼓
寺からも早苗堂　呉石
一彦藏くりゆき
ゆすれ杉く流れし
人乃立つ魚ま　一桐
隠くめる子乃
風のきしかき　梅嶺

宵からく来る猪
羽は火を焼す　桃壺

脚気泥く
膏薬をたしれ　樗亭

大雨りしみ戸し
ほつま夜を林みくれ　一桐

也霞うしこ浪ふ
松乃下　露　飛来

有明うりし母乃
墨にまぜ文とこし　百歳

形見うりしらんと
残しし叢奥　式之

掛もの小袖の
嫁もとに縫つくこ　村鼓

三味糸しらく
なりふり乞食　桃青
東山中こゝを
されたまへる　飛木
けふのとかなる
御見院也うね　一桐
連ゝ卿
わらわかゝ春霞　せん杖を　式之

すいむしのゆせ
庵乃萬芽　呉宮

桃青　五句
梅嶺　二句
飛木　五句
一桐　五句

百歳画　槐市写
村瀬画　呉宕写
式之画

俳諧何布久魯

竹堂一峨編

秋之部

水の色ハ手かゝる也秋の風　京人　元夢

あさかほや咲かはりても蓮かれ　元朝

夕かほや痩も痩たる姿かな　至風

秋の風糸をはらみて紡き哉　郡内　宜樂

蛛風来木母寺あたり来てみれハ　美濃　千阿

河よし野勢や割木をひとを追ふ蛍　兵庫　一草

高鏡庵三十日尓ちかく成初る　保葉

粟稗の風犯中なる蟷螂かれ　上毛　鹿太

蒐楸耳蝉まれ来く峠夕ヶ雅　甲斐　梅舎

孫ありて蛙とりはく経木ゟ角　本宮　冥々

ふた豆子引きあさ折く蘿の色　信濃　若人

つきんと見ゆ宿の小萩かな　阿乃む

父人の十三周忌

三日月尓浮月子かゝりそ萩こぼれ　元夢娘　八重

人涙しくおもかげ哉や二株の下　二本松　麦市

織女富士とおもや芋の喜の鉢　カヒ　一作

ふ器用も又にんかしく家木香　、　巴園

葉ややくて咲中哉う秋し筆子　、　草丸

あさ顔の八重耳浮ちぬる蝶の糸　十六　升六

さ燭くしま拝姆書の一葉かれ　郡内　卜阿

三ヶ月耳おもとう能をととめ尤し　、　自笑

けさまゆくえのえるや芒八月於芋　十エヤ　作有

芒とりうた追しし山とをと紀より　南ア　燕々

和くまくきる浅やなかれ朝むかな　エチコ　都久敬

八朔や雀ゝちやもと燕蝶　安房 其文
芙蓉さむしれハ花の心ゆく　古人 恒丸
このころは毎日菜の花ころ哉　心匙
何となく不二もさまくて咲花む　ヤマト 空阿
明月のや白菊一荷黄菊二荷　一豹
水仙やこんな寒さに菜も家　白石 乙二
秋頃ん抽ふしく盃野菊の花　甲斐 一甫
人に添て分る霧の哉紅葉哉　十二八 豊々
あきの蝶水菜に縁行ひかぬ　好古

栗売や日の入る哉蜻蛉哉　曇潮
来る雁の宿ひれ出ていなさ東風　宵盧
扉そ来れ戸口くの日和さ哉　凡兽
何仙蓑刈まきし雁の声　郡内 東々
来ぬ花藤見えてまとや雪の声　仙タイ 曽臺
ほのくしれ秋の虫に声ちうらし　カヒ 可童
蓑このきし　桂京来りすかく哉　ハリマ 木海
秋の川や高野聖のうしろさき　元凮
大葵や嫁立部君ふし花色　下総 南道

明中のやあまの川風に給さらし　古人 如水
星こゝろ恋わすれぬ逢夜一夜きり　乗年
恋しくや星なりしる朝あらし　浮舩
めづらしく涙をおとしの天の河　甲斐 太年
七夕やまつる草くあるともならし　長サキ 天外
夕暮や嫁まんすゞ風の一羽鳥　松井
明きれて悦てとくれ酥売られ　サカミ 一鷹
此露のこぼれも能きくも秋の心花　叙来
蘆きれ乃声あをこぼれあ我の声　、洞乙

萑色と明ふ暮もあるし秋のくれ　センダイ 文卿
うしろから人声こえりけきの暮　伊勢 為徳
星の庵ハすゝきも桂も娘花の鶉　越後 喜年
志ら露の其間に燃刹る人こゝろ　武蔵 熒市
玉露深や手にとられやうな数の空　上総 子盛
木魚の川音のゝ霧ハきれにけり　京 扇之
山法也色もの立てる霧臭し　カヒ 素玩
嫁花且君猿也と秋のこ山の形　桂瓢
あまの河見え二日よ終りし女郎花　秩父 扑叟

閑さや小竿子のまゑに三ヶの月　下毛　元沙

蔦の種の海たゝ行くまゝ三日かな　カヒ　乞しを

兎も角も下り行の荒哉三日乃月　春樹

吹きるゝや坂東太郎まくらくら　麦宇

侍霄の浪花ちつるそ西ゐき　郡内　草鳥

山里の羅ふき月のゑやうれ　シナノ　蕉雨

吾々くしく庭のうく苦り敷き月見かな　浪花　長齋

湖の名にあれ秋ぞ更りく跡かの月　カヒ　漫々

鮎の名をといくらもちきる月夜かな　州賀

明月に入江斥の浮るかもめかな　ムサシ　斗月

庵のあれ山里ありし起るゝ夜の月　仙タイ　東谿

ゑを中尼介寝言し月一夜　サカ三　南謨

皂斥野分を跡も月夜の鐘　陸奥　可理保

月出てかなしや海辺鳴くとも　岡せキ　卓池

出湯の花香や夜は松の志　サカ三　三芝

笊莓麦子白着たゝぬ夜きかな　古人　布谷

一志あけてきたく後見踊る那　一方

稲妻や五十を越きもうちきまの　昨鳥

長き夜やこ絃にすつきくも杜宇　郡内 牛止

目のうけも耳にあつらへ須磨の秋　名コヤ 岳輅

月待や小田野のかしの阿らし笠　、梅間

親子連れ鐘を考へし里の旅　下フサ 桐我

朝寒や片側町を二階造　ムサシ 麻生

藪陰や野分の朝の晴あかり　甲斐 野鹿

ちらほらと木葉につれて蝶の羽　、真恒

冬之部

庭つ子の机をり出を晴る舟　袁下

四方よりも志らむも不二の山　春蛾

野分の跡の大の道りく志ぐれかな　白芹

志ぐ猿の志ぐれつかれて仕舞をり　一和

しぐるゝや清きかはの乃きれ乞　陶賀

爐に灰も落ち消く火鉢を時雨かな　甲斐 方居

唐松に小服おもしろや神しくれ　、物成

居鴨まてあつまる迄て雲の端　カヒ 蟹守
芋畑に枝のさくほと鐘れたり　仙タイ 巣居
尾花くらへそ三るまもりしくま迄や　十二八 奇淵
霜の夜の甲斐子居ましむ膝臥　カヒ 嵐外
芋北霜　岩くしの蔵まつ冬　、 松凮
冬川霜也　障子明れハ小冬まて　ムサシ 蓑洲
朝あら也　灰をかゝへむし何れ文へやら　サカ三 錦子
初霜まんあつりて手鉄算入たり　安房 也草
何となく衣打ちさく秋よ冬の寒　呑貸

霙ふるひるやぬれ鳴者年籠の外　古人 素嶠
雪何そ純淨くもなくて洪り山　ムサシ 撫夫
大雪やあらし山ふりかれれ　諌圃
こくきけむし障子たらし松の雪　、 深長
おりしろき使者来り葉の雪　下総 柑翠
大息く雪車ひくまの政新藤　、 畝人
枇杷の遥耳由記乃三十日かれ　カヒ 漁遊
月一枝まのもとくおほきし小雪かな　南ア 平角
雪落しても八島の山路この花　イセ 椿堂

忘居る木草もあつきたびら雪　ハリマ　玉屑

讃年のまうやくまつり霊の門　古人　東里

霞まれし島祝ふつまも変りなり　石ノマキ　曰人

さむきれハ梛の菱葉さへ拾ふく　其堂

冬枯山ひと竹く斗日のあたる　来曽

抱かゆる車ふしおく冬枯山　カヒ　可得

何ぞも川飲なき老や冬こもり　青牛

登りて山を持きりふ雨ぐもり　相摸　雀子

たね嵐や月寒くの草花庵　古人　浙江

ふ松子ハ山崖にちまてさかゝり哉　一瓢

妹許の巨燵さのゑや二階から　百我

小鴨ゐるもほのくしさや朝々　道彦

ち川河豚や無盡ほゑわたり足　巣兆

飯喰ふく麻物一つゝり哉ちる根　郡内　花酔

れ多や七子編ミ松ちる風かそ哉　サカミ　松宇

塩見てまも来ハうらみぬ驚の妻　下総　太節

萩のある多ゝ冬住まる枯海　妹田　五長

蕾茄やちゝり嘯秋の花走なり　郡内　連雪

鳴子なる月夜無人も肥りけれ　吉田 木芽

何の木も実をいそかしや鵙鶫　大津 五来

老僧の酢和よくなり帰り花　保葉

る蝿もいきいきとけり枯尾花　葛流

二冬もこらへてやつれかれ芒　仙タイ 美図良

芒から流れ物かなし手を切て　荅マキ 鶏睦

枯原や青菜畠の咲にけり　郡内 來帰

唐破風に鳩もれ出逢へ冬木立　サカミ 峨月

世の中は夢の事なり冬木たち　アキ田 野松

妻ならし花ひらく山茶ヵ花咲ならり　兀雨

連翹や南天咲まで帰り花　理峨

いやさりに枯葉散らく日暮哉　上総 白老

さびしさの庭たくさくら冬ざくら　京 尾全

十月花落乃下なるも炭一俵　十三八 井眉

埋火も後のさかりや善光寺　、 友国

冬の日乃より落して八ッくれぬ　ニタ千 翠兄

寒きかなやさ挽く小松の音やう　カこ 安男

物出ぬ簾風子きまま簾見ゆ　、 苔童

木のはしの中ふ何さるや角大師　郡内 貫珠

名ある月豆腐きりて画にはまかぬ　、桂塢

冬来ても木隠連安し三ケ月　仙臺 雄渕

居鴨ちれ啼あとさく月浴の月　九七 千波

戸明けて天気の上々も雨の月　啄時

世をいとえ拍子は乾取り鉢鼓　廿九三 葛三

臘八や尿無き上ぬしく寒し　下総 雨塘

弓責し去年八来にありて大晦日　郡内 圭兒

春之部

猿とのみ呼子鳥ほり花路春　伊賀 若翁

元日や草鞋ときて見る長の人　守静

見かけの茶一二抱ありくゆめの春　郡内 猪鹿

人形来る元日早々庵の春　下総 恒丸妻

羽子板や桑名あたりの鋼つき　山松

麻の絹や子見子朱金を乎の春　女 一翠

春の夜を麦飯たらす鉄さびん道　青亀

屏新に志むらも青雀なるかな
カヒ 摭村

野嵐に米つく家の梅さかり
、 平歓

宇治の大家に年徳守りけり
ほのぼのと東を縄てうめの花
イセ 滄波

梅の花立てる家深うなりにけり
、 踏白

志ら魚を東堤まで水の形
サガミ 貴女

春の香やそらし茶の朧月夜
律器

ひとりまの捨かくもやうきん花
下総 鶴老

梅が香や菜の種も戻るくし
水戸 遅月

東称めして異なり不二の山
カヒ 重行

試人の間へ帝の格子しるき
名古屋 李臺

鶯の輪乃下行機の柳の糸
百杖

春の子お七の墓子人に尋ぬる
成美

遅き日の室ハきえたり春の雪
イセ 鶴鳴

何ともなくやらうてさ人にはるの雪
甲斐 さの女

蕗の二葉に出し庵の春
出羽 美都良

菜の花や犬もとろりぬ鼓うり
一溪

なれむに猫の子抱てあそぶ迹
秩父 圭夢

国立国会図書館　タイトル『俳諧何布久魯』　請求記号 863-65
ガラス使用

菜の花や来るゝ深くの見俵　沼津 壽山
片里の原の小草も菫かな　荷涼
抹香のこぼれて居て咲こぼれけり　安房 杉長
見るわしのすゝれ摘く菜かな　同
海苔の香や波を風より先きに聞
海苔麁朶干小雨のふりけり夕くれ　郡内 三甫
ちるや〳〵むかいあれど木芽哉　遊耳
大志ゝ嫁をぞ法なり花薊　如雀
日の影や浦に莢ある行傍に杭　兎園

野の花の風添つかき咲にけり　上総 里丸
梅さくや小村へ去れは赤辰　カヒ 吐雲
古郷の々ても売れるこそ桃の花　鬼洞
花さけや佛法まもる蝦夷か嶋　一茶
まんちうの花ありもかよふ茶の花　久蔵
手くの花に寝しぬし刀かな　五風
丸くしてむ越ゆ人をむのけ　十二八 米彦
押さくや雨もしつかに乾まち　里遊
人恋の月今ちりこむ桜かな　八起

山深し霧にぬれたる遅桜　京 月居

朝寐する比幻ありく法の声　丹波 滄洲

男とも生れ来りぬ出代り　酒田 河道

紫の戸や雲にならふ桜人　鶴朝

山吹の花散宿に御忌　イヨ 樗堂

毎日乃夕ぐれ毎にきや花の陰　アキ 篤老

日のかげや柳の下に魚の龍　夜及

ちらし出船ある綱や桜草　女 醜我

遙くさ枕々のや彼岸のそらへ也　郡内 省雅

梓菜も浮ぶや ねはん像　喜水

一日ハ鰈ちらしに芽生也　十二八 三津人

石山や湖へても一里朝かすみ　閑哉

見ともる霞の花はしよ小盃　鼠伯

志賀の浦の庭もかすみてる霞かな　司風

糸柳ハかゝれも霧の柳かな　九烋

勝軍や生残嵐の庭に侠路急　越后 幽嘯

あの花や出しも須广の蘆越　加ヒ 淇青

観知て見るて広き春の山　百鳥

山姫の眉毛ゆるむや春の空　カヒ　花川女

朧の滅る鐘の響そはる北山　江津　自口

さそれ流れくしのこゆみかな　草鳥

春のうち一寸ゆるし軒のつらら　肥後　對酥

鼻そそする乃気おや春の風　廿カ三　玉珂

これ物との雲き中ゆも春風を　長崎　鞍風

春風やうき花も去し古地蔵　下総　雙樹

さそれつ鹿志河まりれる間乃村　一堂

雨の宿や春の心中の月見れめて　カヒ　道尾

見ぬ鐘をとやかくり平字や春の庭　午心

吸物ぞ桃ぞ茶ぞやさる北月　虎渓

大津画の猿のまとこされて春の色　松夫

春雨のさく垣子なき濱乃草　秋中

春なる花見付さく絵やすまて船　カヒ　習之

はなさめま飛ぶ麓て影か伏ん何ぞ　シナノ　如毛

鶯なきれ吹く嘴らくお帰りそ　車両

鶯る午見てきん花のか寡狼手　亀山

うくひすの尾とそほし嘴時風のれ　下総　素迪

うき山の丁子含めに吉野哉　ムサシ 荘丹

美しや巣のうくひすの啼ぬまに　サカミ 方斛

鶯の此鳴ぬ朝あり藪のうへ　女 さく雄

豊宮崎の流を庵にて

雨の夜や硯のうへに啼く蛙　カヒ 真恒

踏まれの影ありひとしきり蛙かれ　白歳

踏のあとの風吹わたる雪菜哉　柏子

芝原や結ひあはせを鳴出けり　司泉

見かくれてやはらく啼千鳥　サカミ 灃水

舟ありしところ雲雀の空になり　ムサシ 其楽

なかなかのおし出されけり春の雨　カヽ 眉山

蛉ならば戸尻ならべて春の雨　百之

田螺との毒の柳此世なりけり　曲阿

井戸端の豆腐に移る小蝶かな　ムサシ 国村

もしも雉や暮てのうちる小雨村　峯峨

尻からげたちより帰る朝嵐　シナノ 湖光

汐汲の心にうかし花のかげ　安房 宗拱

二日灸さらさら市庵へ文鉞ん　完来

春の寝ざめとりもちくらし枕かな　ツクシ 雪甫

鶯も寒く仏鏡ひ免椽の先　甲斐 一作

螺鈿見ゆる戸も正月の雲霽哉　ナコヤ 士朗

ちるの夜や嵐のきやまとめりけし　京 蒼虬

住よしや松に月ふさる春の空　十六 規外

川上に花さくての便宜哉崖走泡　サカミ 不桀

きんさくの松と共春乃花盛し　長崎 菊也

夏之部

更衣ゆうく水無流の那　雲阿

瀬をかん手藤まとり衣かへ　直材

菖色の楮まんなるさよ文忠　下総 月船

折くの無所とりて更衣　ナコヤ 東陽

内儀の子淡りうまる袷かな　四交

友羽織たゝみ何日夜たのしみ亀　老阿

江戸ッ子生れ男ふりより初松魚　春里

阿らひにし麻さし生鯛生松魚　仙タイ　旦々

河内綿花鮓賞ふ友や月の雲　有圭

置れ香のあはれをちらし子規　己岡

ふし染の袖ぬれきやさしかきつはた　郡府　専阿

はやうきぬい香やくれのゆふしかな　アキ　雲蛙

閑居る去猶の庭を帰にけり　下総　可蔦

貝割の大豆子帰やむこゑる　カヒ　夏木

山間の多に移るや常穀　、壽好

手洗ふ踏ん来くぬく水飯也　郡内　真澄

務々川を追まきぬり紅のもの　下総　一白

扇子に腰ぬるゝ涼みに稽假かれ　甲斐　有斐

月の蓮象娘しすまハ月寒なり　荷涼

蚊の中に立まとへある焼香　出羽　長翠

燈朱足も手も虫を月夜かな　蓼松

来ぬ人の雨やうら来のくさの宿　シナノ　雲帯

こ朝帰るこ秋きりみえれ芽の塚　ハリマ　文哉

嫂残行れ子供年交きれゝ子　故園

あかき費何そうくふくみをきへり　季道

国立国会図書館　タイトル『俳諧何布久魯』　請求記号 863-65

ガラス使用

露ぬ世と書ちらしたる扇かな　秩父　五粒

ま帷子手のうち見する扇子哉　揖雨

うまくも淋しくも数寄る新川哉　少年　徐柳

濡仏や世の凉しさを見るとや　仙臺　きよ女

取次る松王丸か若茄子　梅壽

三尺のまうけよ蔓北茄子かな　カヒ　李道

小蕨の伸て四月半ばかり　、　也有

麦秋や此さびしさに寺参　、　鶴遊

馬の尾のまきまくり行く径の形　ムサシ　拼古

牛ゐるも出代りまちか麦の秋　沙羅

冷くと月もさえなり苔の色　丹波　武陵

極楽の絃めも出らし芥子の花　東鳥

杓子とる嫁か作りしきて花　下ノ井　兄直

ふるしやめしいしく粽入るかな　イセ　丘高

竹の子やぬるま枕畫汲みかくし　カに　子謙

乗て皮朝く人行落葉かな　下総　近嶺

夜まきくの見るをぬ程さ扇子かな　十六　瑞馬

一夜茶のたるく間合ひかな　、　竹脊

国立国会図書館　タイトル『俳諧何布久魯』　請求記号 863-65

ガラス使用

夕顔や大めし喰ふて茶盞　下総 升入

嶋山の花り午入し淵の那　ムサシ 星布

くらき池のきゆしおりへハ合歓の花　一阿

うつくしう笛を吹夜そ杜若　安房 部賀

蛙鳴く鉢の間歩き阿や乞ふ　信濃 田年

小家着て一八さへ咲ぬ二三本　センダイ 三及

木の葉浅る浪の雨の手ころ連　ノ旦

鯉鮒もまゐ悦くさみの五月雨　一美女

さゝ浪や理屈も船し子の水　甲斐 可都里

二三本稲植させて晩やなし　周化

稲葉を鼻にかまるや混潦雨　万布

上毛草津にて

夏山や日和さへあぬ温泉の名　上フサ 斗周

涼しさ千清水の風呂一つ用けり　シナノ 素檗

涼りの夢くらくらく凡夜の家　サカミ 雉啄

越路にて

夏男ゟも夏浅嗽ふ船幸か　恵口

暑き日や負れて通る猿の尻　一牛

国立国会図書館　タイトル『俳諧何布久魯』　請求記号 863-65

ガラス使用

あひたりの暑さを凌ぐかざりかな　シナノ 虎杖

夜川や茶碗で呑む大男　下総 素綾

すゞしさや銭まであつく入る扨仕哉　郎内 鼠十

涼しさや耳呪て見るや岩の穴　ムサシ 路若女

もしほや月を横に見る鹿何　文嶷

六月の蜘張業部のゝれど　昌安起

水無月や蝶も小浪にうごく也　ムサシ 雙鳥

謡ふ孔子のまねゝしさや法稜川　受清

追加

夜の月母も蚕麻せん乾かし　名古曽 素英

すゞしさのみくるしかりや儀の人　岩城 沾橘

茶ちりめん紹無雨見る法くさ　越後 石海

いさしひ葉の一品まとし清水の札　安房 亞黙

三の宮家の撓も蛇浮と氷詠の飛　浪花 八千坊

好屋のゝ涼人かねき旅情哉　仝 曾隠

踊る夜乃ほとりや飲せん残草履　武蔵 大兆

いろくし糸ぐる画されて枯尾花　常陸 随和

露さへ世に昔くさくなりにけり　陸奥　与人

夕顔の咲ける川里足あらひ　武蔵　五渡

日あたる梨や一ふさみえて秋の木　古河　普記

吹き返し舟手さはるの柳の蛛　ヒタチ女　茂樹

折杖記

ひとの世の礼といふは杖は年のはじめ
のみて五十のとしは家の内につゑつき
はに六十にありてぞ郷に杖して里中に出
遍しとの人見旅の杖は世にいでたちかへ
さいはひはえよの花をかの名ぞ昔都乃さに
みえぬさき銭花ともちて頃まで所にえおい
袖にふれ小柴はしよき帰る家の宮へまで手の
重つしみどもの家ひかしの書見録をかたみけ

志ら〻此古郷を外にせん此ほとハ旅する
人の耳ハ杖のたすけによりける一筋さへ人
いぬる丁卯の春伊せの内神にまうでてまう
よぎ来杉のあらしハ浅禊ぎに常にれ学
伊賀の国に至りてそれより乃留流浅かつ
ねよ此晃をなしとよく見てわかれ潮をさ
打足浅ひきし袖のなみの青葉浅な
されみ由来して安藤は重ねてまで見め
なとひて京を出しハ百余日の後京堂かね

なつ越して名ねハ佛所和上の木上坐とのひし
あくゑひまうてハ命もはあれ所杖をたすくはれ
めそりく世え千世浅ごめかるかゑるとハつ
とうちちひき風りてそハ世下にみしくなり
ぬられハうちもすすむてて寄もあひしかな
まし、ゆかしの日昔ちりし浅たすけしねをと
物ひへて京おてへひ来りんれ
行て京津をかよ乃あとく見めくりて大佛の
由来請にかくれる見ハすでに拾へ乞も

国立国会図書館　タイトル『俳諧何布久魯』 請求記号 863-65
ガラス使用

かゝる處にそもそも此方廣寺また豊
太閤の御願にして其後御嗣大坂乃君の
再建にて奈良の佛よりも荘厳な
りけるとて詣めぐりの此たびはじめの指すは
まり此御寺家ハ寛政十年の昔雷火
の為めに焼うせて殿堂ひとつものこらず
ぬまた白毫の光もなくうせ慈顔をも
ひ仰ぐ事もかなはず世のなみとて供
縁ひとりをのこせるのミ法滅のうれひをかなしめり

まへに見おとろひまろ錫杖の礼を申なしつ
らねて此所を過ぬのちのつゐに京へ出て京城へ
於きも抜て其の指ある錫を南く江戸まで
持へまゐらせ旅ねのかりまくらにも此錫杖を
あへて安ひもしまた都なる里の地より
にもせんかたなく是を家にかくしむるし芭
蕉の於きたりと件乃於もむき花に於いて翁
とかぬとも也この於杖は花もかれ無
用なりと思ふ事もなく寄てまて来りぬ

くさぐさの詞やよくをあつめて龍と化し
ならしむる紙札を新にすると也

文化庚午仲秋

随斎成美誌

三唫

人もみるや桐の一葉のちるもちる　一峨
月のほそさに吟ふ事もなし　成美
小雨のかゝる山しぐれ雲ぬれて　一茶
しらぬ小鳥か来てもなれ行く　峨
節季候のこの頃くさりもし浮世也　美
拍子とれもしぬきさんの川　茶

塵こ牛の粉のさうりし乳ぶさ哉　嫁

まゝ子此君のあたらかまさり　美

名ふさへ鵜ふかり日長百合の花　茶

餅をせくたゝくのける謎く　峨

附木ほく踊茶ひの店をたて　美

茂助佛ゝ開眼ぞ娵　茶

り給ふしの芳野も月の廣き世ゟ　峩

稚さへあれもすゝんとて居よ　美

年のくれ菓子松楽ゟかゝ哉　茶

花やちる桃く雪やちる様く　峨

古すゝれ死ぬるまてる嬉しさよ　美

東河内（かふち）のおひらんの縫　茶

あゝ旅し尓翁むく驀の旋ぬ　峩

傘ゟかくれてほとゝ此の宿　美

紫陽花もつしもみゟ寄込く　茶

うそほとき和し末の松原　峩

心と言はへの花人尓おほしらん　美

ころも安元三月芸空　茶

山は峩須磨にちらす時津風　峩

涼しく夏など川小酒屋のおく　美

洗ひ酒またハ一人捨れたる也　茶

葛もよしいとれもしと答へし　嵘

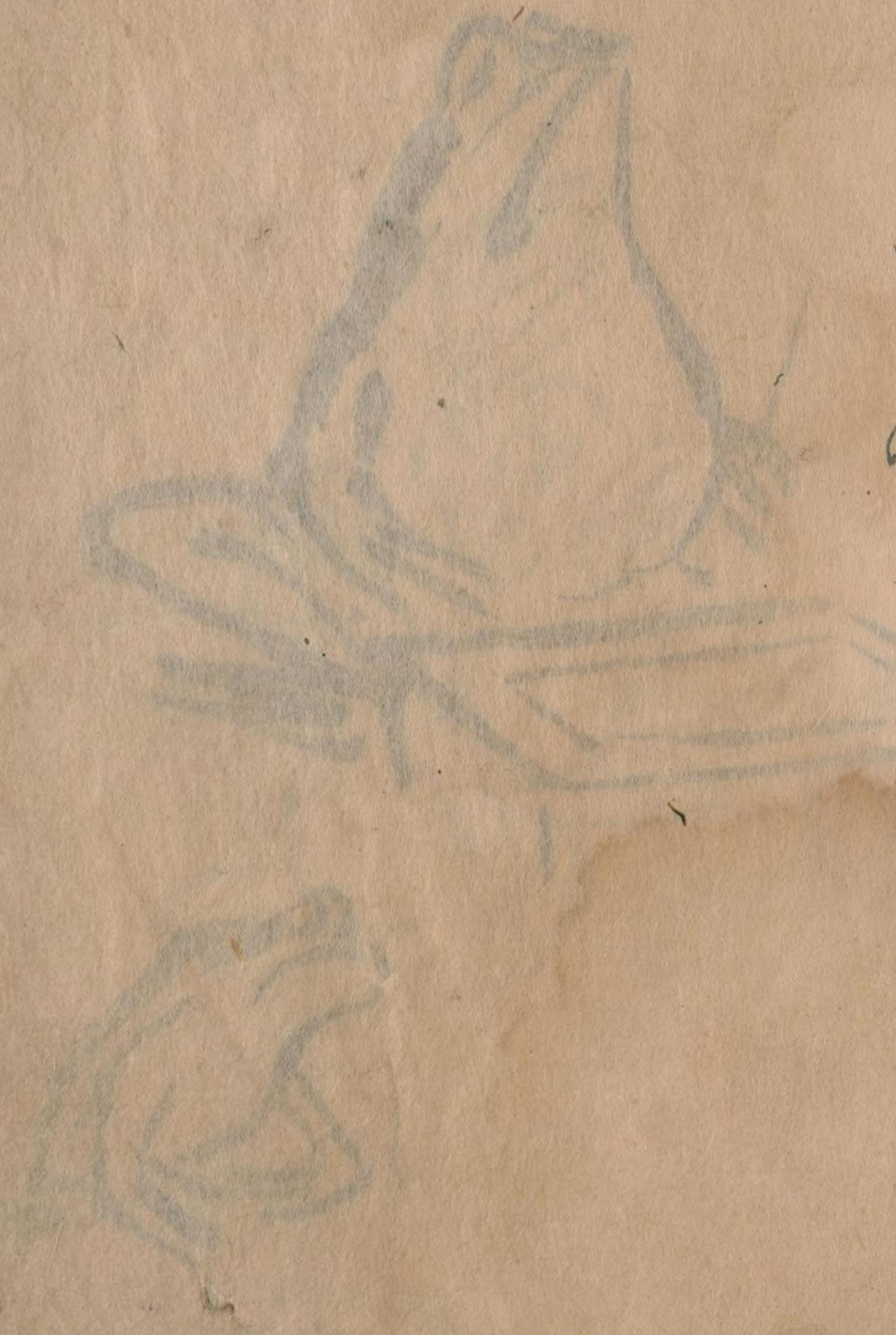
月影や御所の清ふる花菜の袷　美

伯衛門山男　桜井の秋　茶

揺小木も引板のおもまぬ果て　峩

いとまこひ抛しと北丘の虫なく　美

あらしふく黒菎蒻もぬ乾きれ色　茶



歴ての行く赤銭まうし婚礼　峩

誰々志れ出の何もち絵隠里　美

ちのしう一まん雲雀さしつゝ　茶

卅六

国立国会図書館　タイトル『俳諧何布久魯』 請求記号 863-65

ガラス使用

863
65

14124

[illegible]

誹諧何袋

嗣出

京都
本銀町四丁目 大和田忠助
同 播町四丁目 梅澤伊三郎
伊勢屋彦兵衛 蔵
[illegible]初秋
朝倉吉次郎 刻

国立国会図書館　タイトル『俳諧何布久魯』 請求記号 863-65
ガラス使用